

トピックス

1. 播州日誌 さようなら 千パイさん
2. 南国土佐を後にして 第15回



福留経営労務管理事務所

姫路龍馬会

保険労務士・行政書士

福留章

龍馬通信

No. 71

2023年11月号

立冬～小雪の候

愚かな破滅への道

暦の上ではもう冬
秋の終わり冬の始まりの季節
短かった秋に別れを告げて
冬支度が始まる
日中の気温が高く 紅葉前線の南下は鈍い



パレスチナ ハマスの奇襲攻撃
圧倒的な火力を誇る
イスラエルの報復は 激烈
逃げ惑う ガザの人々
南部に逃れても 安住の地はない
激しい空爆の中で日に日に
幼い子供達や女性の犠牲者は増える

憎しみは憎しみを生み
怨嗟の声は渦を巻く
そして 限りない連鎖は続く
歴史上最も困難と言われる
中東問題の解決は程遠く
先進国のエゴは国連の機能を
不全なものにした

灰塵と血と涙の洪水の中で
戦争が拡散していく
出口の見えない戦争が また一つ
阿鼻叫喚の悲鳴が 胸に突き刺さる

人類は何故にこうも 愚かなのだろうか
何も生まない破滅の道を
進むしかないのか
遠く離れた日本で
一体私に何ができるのだろうか

大宇宙の彼方から見れば
国同士の戦争も
ちっぽけな「蝸牛角上の争い」
針の先ほどの出来事
しかし、人が死んでいく現実の
持つ意味は 深刻で重い

秋の深まりとともに
心の隙間に 風が吹く
木枯らしが 冬を連れてくる
遥かなる戦地に 寄り添うことも
悲しみを 共有することもできない

暖かい空間 満ち足りた生活
この日常 平和な時を
何もできない自分を
嘲笑しながら
何となく過ごしている



播州日誌

さようなら チンペイさん

哀惜の情を込めて 「チンペイさん」と呼ばせてもらおう。

1978年 アリスは「チャンピオン」でヒットチャートをかけあがる。荒野を目指すチンペイさんから好々爺となった晩年のチンペイさんまで。私の好きなグループでありソロ歌手でした。言葉を大切に作るフォークの知性と音とリズムを重視するポップスやロックその両方を兼ね備えていたのが「アリス」だと思う。享年75歳。同世代を生きた私にとって彼の死はただ事ではない。



敗戦から20年を経た1965年、学生運動は先鋭化しすぎて破滅の迷路に迷い込む。社会変革の困難さと、社会的・政治的な壁の厚さ堅固さの前に大きく崩れ落ちた現実。当時の若者の心に言い知れぬ敗北感があり、無力感で覆いつくされた時代。マルクス・レーニンを熱く語っていた友人も、就職が決まって長い髪を切った。目的を失った若者は変わり映えのしない現実の世界に埋没していった。チンペイさんの楽曲は、時に激しく魂を揺さぶり、時には優しい旋律で聞く者の琴線に触れた。多くの人はその人柄や巧みなトーク、その作風や歌声に、心を癒された。

独立後彼は「昴（すばる）」や「群青」「陽はまた昇る」などダイナミックで格調高く音楽性を極めた名曲を発表した。「群青」の中で「せめて海に散れ」と歌い「昴」の中で「われは行く青白きほほのままで・・・」「われは行く さらば昴よ・・・」と絶唱する。団塊の世代、学生運動での敗北・挫折。どうにもならない社会に、怒りをぶつけるのではなく、優しく語りかけた。天才的な流麗な詩 そして絶妙に紡がれたメロディー。

「日本のどこかに あなたを待つてる人がいる・・・」は多くの日本人を元気づけた。そして自分探しの旅はブームとなった。人生の応援歌として「サライ」は秀逸だ。「きっと会える・・・きっと会える・・・きっと会えるから」のフレーズは心に残る。

多くの歌手やグループがラブソングに酔い痴れていた同時代に「アリス」「チンペイ」は大人であり続けた。都会的であり、ダンディズムに溢れていた。名曲の数々は枚挙にいとまがないが、多くの人に語り継がれ、歌い継がれていくだろう。国際的にも活躍したチンペイさんは多くの人に愛されたまま天国へ旅立った。

感謝の気持ちを込めて、さようならチンペイさん。

2023. 10. 26

第6回 社労士 野口 亮 がゆく

事務所の屋上に上がると、南に新幹線が通り、すぐ北側に加古川 BP の高砂西インターがある。久しぶりに屋上に出て思い切り深呼吸をし、デスクワークで熱くなった頭に新鮮な空気を入れた。といっても今日も多くの車がけたたましく走行しており、新鮮な空気かどうかは、はっきりしない。ヘンスに寄りかかってちょうど差し掛かった新幹線の上り下りの列車が交差するのを眺めていた。いつもながら新幹線の流れるようなスピード感は見ている気持ちがいい。

胸ポケットのスマホの着信音が響く。古くからの顧問先であるクリーニング会社の社長からの電話。「アイロンプレス機に挟まれて少し火傷をしてしまったが、たいしたことはないようなので労災でなく、置き薬で少し様子を見ようかと、本人もそういっているの」「社長それはだめですよ。安全装置は?」「それが本人、面倒だか



らと外していたのですよ」「それは大問題です。とりあえず病院に連れて行って治療を受けてください」「労災かくしは犯罪です。どんな小さな怪我でも労災は労災です。」「すぐ5号（療養の給付請求書）作成しますから、いつもの通り事故報告書で情報を入れてください。」一般に小さな事故の場合労災にたくないというのが社長さんたちの本音。規模的にメリット制の対象にはならないのだが。数時間後、被災者と事故発生の状況、病院名などの情報が入る。事務員に5号作成を指示してメールで送信する。

後日、訪問した時の社長との会話。「先生、労災にしておいてよかったです」「治療後後遺症が出まして」「左手の甲ですが、結局太ももの皮膚を移植したのですが、触るとピリピリした痛みが走り、一生手袋をしないと駄目なようです。」「そうでしょう火傷は後遺症が残ることが多いのですよ」「治療中なので、症状固定を待って後遺症障害の支給請求を申請します。」やはり火傷は気を付けないと後遺症が残ることが多い。それは長い社労士の経験則から確信している。

さらに後日、障害等級の12級が出て数十万の一時金が支給された。被災者は一生この後遺症と付き合っていかなければならない。労災の発生を絶対的に0にすることは極めて困難なことである。そうだとするならば日常的に安全と衛生に配慮し、労災の発生しにくい職場環境づくりを心掛けねばならない。社労士はこの安全衛生の分野でも専門的な知識をもって顧問先に寄与しなければならない。

屋上から見る日の出は美しく、早朝の空気は澄んでいて気持ちがいい。今日1日の仕事の段取りを考えながら、しばし日の出の光景を楽しんでいる野口であった。



創作 ショートストーリー 土佐のしば天 花どろぼう

土佐の高知に住み着いた妖怪、しば天狗、通称「しばてん」。妖怪だって晩酌はする。肴は特にこだわらない。秋の深まりとともに日本酒の爛酒が恋しくなる。折も折、顔見知りの百姓の作造がやってきた。「これをぬる爛にしてやっとうせ、こじゃんとうまいぜよ。」と一升瓶を差し出す。

作造の相談事とは、花泥棒のこと。作造が趣味で育てている花が、毎月のように一鉢盗まれるという。今は幾種類かの菊の花が満開だという。何か事情があるなら一言断ってくれたらと人のいい作造は言う。「わかった花泥棒を捕まえて、説教しちゃう」しばてんは、合点承知と、それから幾晩か作造の家の前に張り付いて見張っていた。

ある日の夜中、初老の爺さんが、どこからか現れて、軒先の花を一鉢盗もうとしている。そこでしばてん、飛び出して「おんちゃん何をしゅうがぜよ」「花泥棒に悪人はおらんというけど、なんぞ事情のあつてのことかえ」「ええ、あのその、申し訳ありません。寝たっきりの女房がおりまして、そいつに花の一つも見せてやろうと・・・」「悪いことは知りながら、その日暮らしの貧乏所帯、お金もなく・・・」「ああそうかえ、けんども黙って持っていったらどろぼうぜよ、悪いことは言わん、思い切って訳を話せば作造さんもいい人じゃき」。初老の男はぺこぺこ頭を下げて、作造に謝って、言葉少なに事情を話した。作造はあまり年も変わらぬ老人の話を聞いて、ポンと手を打ち、「そんなことなら一言声をかけておくれ、一鉢でも二鉢でも、持っていったらええ。」「ばあさんを喜ばしちゃって。さあさあ、今夜も好きなやつを持ってい



き」と、菊の一鉢を持たせた。それからは必ず作造に声をかけて一鉢を月に一度ぐらい、持って行ったと。ばあさんは花の一鉢に手を合わせて喜んだと。

ええ話じゃのう。ええ話を酒の肴に今夜ももう一杯飲むがぜよ。

よかった、よかった。まっことよかった。

～南国土佐を後にして～

第15回 「三島編」 ビヤホールのウエイター

西武デパートビヤホールのウエイターの仕事。全部で35ほどのテーブルの4～5テーブルの担当になる。注文はチケット制だから半券をちぎって厨房に出す。挨拶は元気に明るく「いらしゃいませ」。厨房もアルバイトが入っている。彼らは俗に言う「まかない付き」で空腹を満たしていた。多くのウエイターの楽しみは客の残したものを飲食することで、下げてきた客の残したものをカウンターの陰に身をかがめて飲み込むようにして食べた。焼き鳥に串カツ、チーズにクラッカー。何でも食べた、まるで欠食児童のように。特に女性客は、まるまる残す人が多いので絶好のターゲットになった。ビールの飲み残しを飲むのは止めといた。顔に出てしまうので。仲間うちでのトラブルの一つは、残ビールを飲んで顔が真っ赤になり、仕事ができなくなって主任に見つかり即解雇。最大のアクシデントは、六つの大ジョッキを両手に持って、客のテーブルの直前でつんのめって客にビールを浴びせてしまったこと。女子の主任が即対応していたが、客は怒り心頭暴言を吐く始末。彼もその日を最後に姿を消した。ビール大ジョッキ6杯分の損害は彼のバイト料から差し引かれた。

国鉄東海道線三島駅沼津間は4～5駅の距離にあった。約1か月半のアルバイト。夜5時ぐらいから9時ごろまで。同じ下宿から仲間が3～4人いたので、行きも帰りも心丈夫だった。特に帰り道、1.5キロぐらい夜道を歩くのだが、人家もまばらな場所に差し掛かるとよく声がかかった。「おい、文屋（ぶんや）」新聞記者志望の私は文屋というニックネームで呼ばれていた。「おい文屋、土佐の高知を歌ってくれ」のリクエスト。バンカラなもので夜道を各地の民謡など大声で合唱しながら歩くのである。まさに高歌放吟。お国訛りの民謡は疲れた体と心に、程よい癒しとなった。「土佐の高知のはりまや橋で・・・」私は遠慮なく大声で歌った。ヨサコイ ヨサコイと合いの手が入る。実は歌うたびに胸にこみ上げるものがあり、涙をこらえていたことを彼らは知らない。

LGBTの問題がかけらもなかった時代のこと。ビールの注文があると、つまみとしてクラッカー2枚をつけることになっていて、これはウエイターの仕事。ある男性のお客さん。サラリーマン風である時期毎日のように飲みに来た。同じテーブルに座るので私の担当であり、時々軽口を叩くようになった。普通1杯につき2枚のクラッカーを4枚に増やしてサービスしていた。彼はにっこりと笑って会釈で答えてくれた。ある日同僚から注意を受けた。「お前狙われているぞ」「第一毎日来ること自体、減多にないことやから」「きっとGでお前を狙っているに違いないと」。翌日からテーブルの担当を変えてもらい、なるべく目を合わさないようにして、この問題は解決した。

学生ばかりのバイトでは心もとないということで、女子従業員が監督として毎晩勤務していた。特に注意されたのは、BGMとして流されていた洋楽、例えば「蜜の味」などの曲に合わせて体を揺らすこと。若さもあり体をじっとさせているのは苦痛でもあった。それから「盗み食い」は客に気づかれないようにすること。主任の人によっても違いはあったが盗み食いは当然のこととして許されていた。しかもテーブルの上や下に置き忘れられた小銭やたばこの類も私してよかった。よい時代であった。1か月の間に主任の一人と仲良くなった。昼間に数回デートした。貧乏学生ゆえ食事や喫茶の代金は彼女が払ってくれた。これもよい時代だった。1か月半があっという間に過ぎ、もう記憶にないが給与を得た。セーターや下着、帰省の費用であっという間になくなってしまった。

かくて、本格的な初めてのバイトは終了した。

